主日礼拝説教「清く、義しく、美しく」予稿

日本基督教団石神井教会　2026年11月1日

【旧約聖書日課】創世記　9章8～17節

8神はノアと彼の息子たちに言われた。
9「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。11わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」
12更に神は言われた。
「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。13すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。14わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、15わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。16雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」
17神はノアに言われた。
「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　5章12～21節

12このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。13律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです。14しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。15しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。16この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません。裁きの場合は、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。17一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。18そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。19一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの

人が正しい者とされるのです。20律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。21こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。

【福音書日課】ルカによる福音書　11章33～41節

33「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。34あなたの体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るいが、濁っていれば、体も暗い。35だから、あなたの中にある光が消えていないか調べなさい。36あなたの全身が明るく、少しも暗いところがなければ、ちょうど、ともし火がその輝きであなたを照らすときのように、全身は輝いている。」

37イエスはこのように話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。38ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、不審に思った。39主は言われた。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにするが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。40愚かな者たち、外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか。41ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる。

虹を見たら【こども説教のために】

神が洪水を起こされたとき、ノアは、神に命じられた箱舟を作り、自分の家族と選ばれた動物たちのつがいを乗せて、雨がやみ、洪水が収まるのを待ちました。そして、洪水の後に箱舟を降りると、神のために祭壇を築いて礼拝をしたのです。そこにおいでくださった神がノアに見せてくださったのは、雲の中に現れた虹でした。虹をお見せくださって、契約を結んでくださったのです。それは、ノアとその家族、またその子孫として生まれるすべての人、そして、箱舟に乗せられた動物たち、乗せられなかった獣たち、すべての生き物を、滅ぼすことなく祝福してくださるという約束でした。人がどれほど心に悪い思いを抱くことがあっても、神は、人と世界を罰して滅ぼすようなことはなさらない、というのです。その約束を、神は、虹を見るたびに心に留め直される、というのです。

この世界も人間も、神はすべて、良いものとしてお造りくださいました。ご自分でお造りになられたものですから、それを壊して捨ててしまうこともおできになるはずですが、神は、決してそうなさらないのです。それは、この世界も人間もすべて、神の御目に良いもの、美しいもの、清く正しいものだからなのでしょう。人が自分の中に悪い思いを密かに溜め込んでしまっているときにも、神は、美しい虹を空に架け、人の目を天に向けさせ、心を開かせて光で照らし出し、人を美しく輝かせようとしてくださるのです。

死はすべての人に

日本基督教団では、11 月第一日曜日を「聖徒の日」と定めています。死者の記念をする日です。「永眠者記念日」「逝去者記念日」などと呼ぶ教会もあります。西方教会の伝統である 11 月 1 日の「諸聖人の日（万聖節)」と 11 月 2 日の「死者の日（万霊節)」を受け継いだ記念日です。今年は、たまたま 11 月 1 日が日曜日に当たりました。この日、多くの教会で死者を記念する礼拝が執り行われていることでしょう。

石神井教会は、ある時期から、この記念礼拝を 10 月に繰り上げて行ってきました。その理由を、わたしはお聞かせいただいていませんが、今年も例年通り 10 月に執り行いました。そうすることで、11 月第一日曜日には他の教会で執り行われている逝去者記念礼拝に出席される方もいらっしゃるようです。教会を移るなどしたために、同じご家族の中に異なる教会で記念されている方があるという場合も少なくないからです。

そうなさるのは、記念礼拝を執り行う多くの教会で、逝去者名簿の読み上げがなされるからかもしれません。しかし、それは、神がその一人ひとりの名をお憶えくださり、お呼びくださっていることを思い起こし、その人々の名の列に、いずれ自分たちも加えられることを確かめるためなのです。

先週の平日三日間をかけて開催された日本基督教団総会では、二日目に逝去教師記念礼拝が執り行われました。前回二年前の教団総会以降に逝去者として数えられることになった 150 人程の教師の名が読み上げられました。教師は、在任した教会の記念礼拝で名を挙げて記念されるとは限りません。しかし、各教区や教団全体で、逝去教師を記念するのです。

教会は、死者を記念してきました。これからも記念し続けるでしょう。大切なことだからです。

もっとも、記念しなければ死者に困ったことが起こる、というわけではありません。かつてカトリック教会では、死後の「煉獄」がしきりに説かれていた時代がありました。生前の罪を「煉獄」で償った後でないと「天国」に入ることができない、と教えられたのです。それは、皆が生まれたときに洗礼を受けるのが当たり前の社会で、「天国行き」が保証されているからと言って悪事を行うようなことがないようにとの教育的な理由で説かれていたのでしょう。しかし、それを商売にして「贖宥状」なるものを販売した輩がいたために、宗教改革者 M･ルターの告発が始まったのです。

教会は、主イエス・キリストの死によって「死の支配」が終わったと教えてきました。「死」は、その人の滅びではないのです。滅んで、その名が忘れられてしまう、というようなことはないのです。それは、ノアの前で宣言されているように、「箱舟」から出たすべての者に向けた約束なのです。

外側も内側も

先週の月曜日、古い在天会員（逝去教会員）のご家族の葬儀を執り行ってきました。故人は 95 歳とご高齢で、生涯独身を貫かれた方でしたが、ご親族や親しくされていた方々が大勢お集まりでした。ご親族の中にキリスト信者も数人いましたが、ほとんどは未信者の皆さんです。ただ、多くの方があるキリスト教学校の同窓生ということで、讃美歌を歌うことや主の祈りを唱えることには親しみを持たれているようでした。

10 年前、石神井教会に着任した頃、幾人かの方から、ご家族の葬儀について相談をいただきました。未信者の家族が亡くなったとき、教会で葬儀をしてもらえるか、というお問い合わせでした。幾人もの方が同じことを尋ねられたので、それまで石神井教会では未信者の家族の葬儀をなさっていなかったのかと思いましたが、実際には、ずっとなさっていました。ただ、そのことを皆さんは知らなかったのです。以来、皆さんには折に触れて、未信者のご家族の葬儀も執り行うことをお伝えしてきました。実際、この 10 年でわたしが執り行わせていただいた葬儀は、簡易なものを含めて 50 件ほどですが、その内の 8 件は未信者の教会員家族のご葬儀でした。

もちろん、だからと言って、皆さんが未信者のままでよいとは思っていません。できれば、皆が洗礼を受けた信者になっていただきたいのです。洗礼は、主イエス・キリストと結ばれることです。ご自身を、その人生を、主イエス・キリストと結びつけていただきたいのです。主イエス・キリストがそうなさったように、「神の子」として生きていただきたいのです。

「自分はとても神の子として生きることなどできない」とおっしゃるかもしれません。真摯にご自分と向き合われる方ほど、そうおっしゃいます。確かに、安直に「自分は神の子」と言えてしまうのも、どうかと思います。そうだとしても、「神の子」にふさわしく生きることを諦めて、開き直って身勝手な振舞いを続けるというというのも、違うのでしょう。

外面だけでも「神の子」らしくしたらよいでしょうか。けれども、主イエスはむしろ、外面ばかりを整える者を非難されて、自分の内側が清められるようにされることを、お教えになられたのです。「**外側を造られた神は、内側もお造りになった**」からです。

外面も神の御前に立つ「神の子」らしくしたらよいのです。わたしたちは、内面をも、主の光によって照らし出していただくのです。照らし出されたものを、一つひとつ取り出し、自分の手から離していくのです。そして、「神の子」にふさわしく、外面も内面も、神に造り直していただくのです。

それが、わたしたちの「死」の備えになるでしょう。「神の子」として完成していただくところにひたすら向かって行く備えになるのです。